

# 琉球大学学術リポジトリ

## 与那国方言のとりたて

|       |  |
|-------|--|
| メタデータ | 言語:<br>出版者: 琉球大学島嶼地域科学研究所<br>公開日: 2020-09-15<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 目差, 尚太, Mezashi, Shota<br>メールアドレス:<br>所属: |
| URL   | <a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/46705">http://hdl.handle.net/20.500.12000/46705</a>                              |

【研究論文】

与那国方言のとりたて

目差 尚太\*

Toritrate in Yonaguni Dialect

MEZASHI Shota

要旨

《とりたて》とは、現実世界の他のものごととの関係を前提にしながら、現実世界のあ  
る一つのものごとと、単語の文法的な形によって表現される、文の内容としての《ものご  
と》との陳述的なかわり・意味を一般化した文法的なカテゴリーである。与那国方言に  
おける、代表的なとりたての形には、*ja*《対比》、*du*《特立》、*bagai*《限定》、*N*《共存》《極  
端》、*bagiN*《共存》《極端》がある。これらの形式を、話しあいの構造との関わりの中で、  
明らかにする。

Abstract

This paper is a descriptive study of the grammatical category of "Toritrate" in Yonaguni dialect (Yonaguni Ryukyuan). Toritrate is a predicative meaning that expresses an attitude towards a relation between things in the real world and things as sentence parts. This paper aims to describe the use of the toritrate markers *ja*, *du*, *bagai*, *N*, and *bagiN* in their structure of discourse.

はじめに

《とりたて》とは、鈴木 1972 によれば、「そこに表現されているものごとが、現実にある同類のものごとに対してどのような関係にあるのかを話し手のたちばかりからあらわしわけ  
る」[鈴木 1972 : p.231]陳述的な意味であるとされている<sup>1)</sup>。陳述的な意味とは、陳述的な  
かわりとも呼ばれていて、文の内容としての《ものごと》と現実世界のものごと（出来  
事）のかかわりのことをさしている<sup>2)</sup>。

陳述的な意味は単語や文のさまざまな形・むすびつきによって表現されていて、さまざま  
な陳述的な意味のタイプがある。それら一つ一つの陳述的な意味が構成要素となってい  
て、体系としての《陳述性 predicativity》をなしている。

そのため、陳述的な意味の間には、階層がある。その階層は、いまだ詳しく明らかにさ

---

\* 琉球大学大学院人文社会科学専攻博士後期課程・日本学術振興会特別研究員  
Ph.D. Student, Graduate School of Humanities and Social Sciences, University of the Ryukyus.  
Research Fellowship for Scientists DC, Japan Society for the Promotion of Science(JSPS)

れていないが、その中心にモーダルな意味（モダリティー）が存在していることだけは、確かである。たとえば、文のモーダルな意味に、《たしかさ》《論理的な態度》《聞き手利益への配慮》《感情＝評価的な態度》などの、さまざまな話し手の態度が付け加わっていることは、よく知られていることである。《とりたて》は、その階層の中の一つとして存在している。

本稿では、《とりたて》を次のように規定する。《とりたて》とは、現実世界の他のものごととの関係を前提にしながら、現実世界のある一つのものごとと、「は」「も」「だけ」などの単語の文法的な形によって表現される、文の内容としての《ものごと》との陳述的なかわり・意味を一般化した文法的なカテゴリーである。もちろん、陳述的な意味のほとんどがそうであるように、文の内容にさしだされる《ものごと》と現実世界のものごととを関わらせるのは、話し手である。また、現実世界の他のものごととの関係を前提に持っているのも、話し手である。ここでの現実世界のものごとは、場面や文脈にさしだされているものごと、話し手や聞き手の想定（知識）の中にあるものごとまでを含みこんでいる。

本稿では、《とりたて》を表現する、与那国方言の諸形式を記述する。

## 1. 分析の観点

《とりたて》が陳述的な意味であるとするれば、他の陳述的な意味と同じように、文のモーダルな意味に従属していることもたしかである。なぜなら、《とりたて》の形をとる単語が表現する《ものごと》は、文の内容と現実世界の出来事との関係を表すが、文のモーダルな意味に包まれた《ものごと》として存在しているからである。

たとえば、「パンは食べた?」「パンは食べろよ」「パンは食べたよ」における「パンは」は、それぞれの文に応じて異なったものとして存在している。「パンは食べた?」の「パンは」は、たずね文の内容として関係づけられている、事実未確認の《ものごと》である。「パンは食べろよ」の「パンは」は、命令文の内容として関係づけられている、ポテンシャルな《ものごと》である。「パンは食べたよ」の「パンは」、ものがたり文の内容として関係づけられている、リアルな、事実確認された《ものごと》である。それぞれの文における「パンは」は、さまざまなものとして文の内容に取り込まれているのである。

しかし、これらの文の内容において、「パンは」は単語の文法的な形としても存在していて、相対的にそれ独自のあり方＝陳述的な意味も表現している。一般的に、この単語の形が表すものは、《対比》である。《とりたて》は、陳述的な意味の一つとしてモーダルな意味（モダリティー）に従属しているとしても、それ独自の陳述的な意味を表してもいるのである。

したがって、《とりたて》とはどのような陳述的な意味であるか記述するためには、文のモーダルな意味＝モダリティーとのむすびつきの中で記述しながら、《とりたて》の相対的な独立性は何であるか記述しなければならない<sup>3)</sup>。さらに、文の内容は、《話しあいの構造》の構成要素であって、他の文との相互作用によっても特徴づけられるので、話しあいの構造の中で、話し手が、どのようなものごととして文の内容に取り込んでいるのか記述しなければならない。これが、最も重要な、一つ目の分析の観点である。

一方で、《とりたて》が陳述的な意味であるとするれば、文のモダリティーと同じように、それに相応しい、それを条件づける対象的な内容のタイプを持っている。本稿では、《とり

たて》を単語の形によって表される文法的なカテゴリーとして基本的に位置づけているので、《とりたて》が単語の内容のタイプ、すなわち、単語のカテゴリカルな意味にも条件づけられていることを、記述しなければならない。カテゴリカルな意味とは、文法的な意味との関係で語彙的な意味を一般化したものである。語彙的な意味＝カテゴリカルな意味が二つ目の分析の観点である。

実際、**bagai** の形をとる単語が時間名詞と数量名詞である場合、《程度》を表す副詞になってきて、連用修飾語として働くようになる。

1) ginnimunhanguni: unti sanbonbagai iriti,

ギンネムン飯ごうに 芋を 三本ぐらい 入れて、(省略)

しかし、数量名詞が文の中で《もようがえの対象》などの構文論的な意味として《物》を表すようになれば、**bagai** の形をとる単語は《限定》を表すようになる。

2) ita:, u: jininbagai muti waiti ifi turafi wannii.

じゃ、それ 千円だけ 持って いらっしやって やって ください。

それに対して、**bagai** の形をとる単語が時間名詞である場合は、《物》として表現されていない。**bagai** の形をとる単語がとりたてを表すのは、その単語が人や物を表す名詞であるのが基本的であるだろう<sup>4)</sup>。

二つ目の観点と関わって、三つ目の分析の観点、すなわち、とりたてを表す単語の形が文の部分のどこに据えられているかということも重要である。実際、**bagai** の形をとる単語が、連用修飾語に据えられるか、補語に据えられるかで、意味が異なってくる。これは、構文・機能的なむすびつきが、構文・意味的なむすびつきを条件づけていることから証明される<sup>5)</sup>。

本稿では、以上の三つの観点から分析して記述する。

## 2. 与那国方言における《とりたて》を表す諸形式

与那国方言において、《とりたて》を表す形式には、**ja**、**du**、**bagai**、**n**、**bagin** などがある。これらの形式が、対立しながら、統一して、《とりたて》という文法的なカテゴリーを表現している。

データは、文化庁調査「各地方言収集緊急調査」(1977～1985)において収録された自然談話資料を中心に書き起こしたものである。話者の名前はイニシャルで記す。尚、波線部は他のものごとを何らかの形で示す言語情報で、実線部は対象となるとりたての形があることを示している。

文化庁調査「各地方言収集緊急調査」(1977～1985)<sup>6)</sup>

●1 「昭和 53 年度 各地方言収集緊急調査 調査地点 沖縄県八重山郡与那国町久部良」

- ①M・E (明治 39 年生) ②M・M (明治 41 年生) ③M・G (大正 2 年生)
- 「昭和 53 年度 各地方言収集緊急調査 調査地点 沖縄県八重山郡与那国町祖納」  
① I・S (明治 25 年生) ② I・M (明治 30 年生) ③A・C (昭和 6 年生)
- 「昭和 54 年度 各地方言収集緊急調査 調査地点 沖縄県八重山郡与那国町比川」  
① I・H (大正 7 年生) ②F・S (大正 8 年生) ③M・S (大正元年生)
- 「昭和 54 年度 各地方言収集緊急調査 調査地点 沖縄県八重山郡与那国町比川」  
①K・N (明治 29 年生) ②F・Y (大正 5 年生) ③A・C (昭和 6 年生)
- 「昭和 54 年度 各地方言収集緊急調査 調査地点 沖縄県八重山郡与那国町比川」  
① I・T (昭和 11 年生) ②I・H (昭和 5 年生) ③M・K (明治 38 年生)  
④M・G (大正 2 年生) ⑤T・S (大正 2 年生)

## 2-1. ja

ja の形をとる単語は、現実世界の他のものごとと比べ、際立っているとみて、話し手がとりたてた《ものごと》を表す。すなわち、ja の形をとる単語は、《対比》を表す。はじめの用例は、ja の形をとる単語が主語として働いている場合である。

3)

G : agamintaŋa maŋuntaŋa ku: munuja tami ndaŋa baga:ru  
子供達が 孫達が 来る ものは 教えて あなたが 分かる  
munuja buru tami turaŋi wari.  
ものは 全部 教えて ください。

E : aŋado:, だけど、

G : n.

E : ma naibagindu naru. naigaraja naidanginu.  
今までは できる。これからは できなそう。

G : e.i.

E : tukurudukuru baŋŋidu kiru...  
所々 忘れる…

G : iŋe:. ma:  
そうね。

E : so:tidu arujungara,  
わけだから、

G : e.i.

E : ndaninu t'untagadu nagara ubuiti tuiti.  
あなたのような 人達が 今から 覚えて 取って、

G : n. うん。

E : iranutu naranun.  
やらないと いけない。

G : ja. anuja kitsuatsunu nuppa naitiju, nun nun naranundja.  
私は 血圧が 変に なってね。何も 何も できないんだぞ。

この用例では、方言を教えるのは誰であるのか、話し合っている場面である。G は、E が方言を子供達に教えるよう、依頼している。そのことは、破線で示してある依頼文があることによって理解できる。G は、E が教えることが望ましい出来事であるとみて、その活動の実行を求めているのである。それにたいして、E は、点線で示してあるように、自らの身体的な特性を根拠にして、波線で示してあるように、方言を子供達に教えるのが自分ではなく、G でなければならないという意見を、必要の判断を伝えるものがたり文で伝えている。

しかし、話し手 G は、そのような活動を実行することが不可能であることについてものがたり文で伝えている。このことは、ものがたり文のうちけし動詞の述語「naranun できない」がさしだされていることから、理解できる。つまり、話し相手 E の想定を否定しているのである。そして、この述語とむすびつく主語に、一人称の人称代名詞「anu 私」がさしだされている。この主語に現れてくる名詞は、ja の形をとっている。つまり、ja の形をとる単語=主語は、望ましい出来事の主体として与えられていたものごと=E と比べて否定され、不可能である活動の主体として際立たされてさしだされているのである。

次にあげる用例は、ja の形をとる単語が述語として働いている場合である。

4)

G : anja ndiŋa ..... t'sari ..... e: kamjanki ninai turaŋi wataru  
 私が あなた達が 申し上げて、 先祖に 願って くださった  
bundido uguraninunki, naibagin  
 御恩を 返せなくて、今まで

E : nsan.大丈夫だ。

G : burija ki buija kiru.  
 無礼は して いる。

この用例は、話し相手 E=老人達がしてくれたことにたいして、話し手 G が恩を返せていないと、伝えている場面である。話し手 G は、まず E にたいして「bundido uguraninunki 御恩を返せなくて」という活動ができないでいることがつづけ文でさしだされている。その後、「burija ki buija kiru 無礼はしている」という活動・態度をしていると、いいおわり文（ものがたり文）で述べている。つまり、活動・態度が並べられているのである。そして、その活動・態度は、つづけ文の活動とは反対の評価を受けているものである。したがって、話し手 G は、ふたつの活動を比べて、そのうちの主要な活動・態度「burija ki buija kiru 無礼はしている」を際立たせるために、ja の形をとる単語をいいおわり文の述語に据えているのである。

次にあげる用例は、ja の形をとる単語が補語として働いている場合である。

5)

E : naigara mari ku agaminta banta nut'inu aru aija ta:mi  
 今から 生まれて 来る 子供達 私達 命の ある 間は 教えて

narafijufikibi:i: hanafija ta:mi, dana hanafija ka k'atimibi,  
 習わせて、良い話は 教え、ダメな話は 捨てさせて、  
dana kutuja k'atimibi, rippani tata kutudo. kamado.  
 ダメなことは 捨てさせて、立派に 立たす（育てる）ことだよ。カマド。

この用例における場面は、まえの例と同じ場面である。まえの用例の話から進んで、話し手Eは、Gに対して、恩を返すことはどういうことなのか、下線部で示してあるように、当為の判断を伝えるものがたり文で伝えている。ものがたり文が伝える内容は、立派に育てるということであり、その《様態=方法》がつづけ文にさしだされている。そして、そのつづけ文には、「i: hanafi 良い話」と「dana hanafi ダメな話」という反対の《ものごと》がさしだされている。したがって、話し手Gは、ふたつのものごとを比べて、際立たせるために、jaの形をとる単語をつづけ文の補語に据えているのである。

## 2-2. du

duの形をとる単語は、現実世界のものごとを大事なものとみて、話し手がとりたてた《ものごと》を表す。すなわち、duの形をとる単語は、《特立》を表す。

次にあげる三つの用例は、たずね文の部分に、あるいは、その答えとしてさしだされるものがたり文の部分に、duの形をとる単語が現れてくる場合である。その場合、duの形をとる単語は、たずね手にとって知りたいものであるし、それに対するものがたり文の話し手にとっても伝える必要のある、大事な《ものごと》である。

6)

I : ku:fu: bantaŋa ksu:fu: ittihadimi itaru basuja o:misokanu fɪdu attaru-ja.  
 空襲 私達が 空襲 一番始めに やった 時は 大晦日の 日だったよね？  
 F : N: dzu:gatsunu dzu:sannifidu ataru. fo:do imagorodatta.  
 10月の 13日だった。 ちょうど 今頃だった。

7)

A : ifi: ita nsa warunsa: . e damit'uja: nmi wara iti.  
 そう。じゃ 大丈夫で いらっしゃるんだろ。 病人は どこに いらっしゃる？  
 B : e: kumido: dugami warafi burundja: umanki ko: kadzuo: ,  
 ここだよ。休ませて いらっしゃって いるぞ。そこに 来い カズオー、  
umidu warja: .  
 そこに いらっしゃるから。

8) [戦闘機が飛び回っていた時のことを話している]

F : u: u ikkaibagaidu unu fo:meino jamaja du: agarataru-sa: .  
 それ[戦闘機] それ 一回だけ その 照明の 山は 明るくしただろ。  
 I : ife. ikkaidu agarataru.  
 そうね。一回 明るくした。

次にあげる用例は、まえの用例と違って、たずね文が先行していない。しかし、話し手は、聞き手にとって有益な内容を伝えるために、あるいは、話し手にとって望ましい結果をもたらすために、必要な内容をものがたり文で伝えている。そのようなものがたり文の部分として *du* の形をとる単語が働いている。

9) [E がこれまでできてくれたことに対して、G は恩を返せていないと伝えている]

G : burija ki buija kiru.

無礼は して いる。

E : ujajo: karada kenko nai, dami katjaru munudu bundi aru.

それはね 体 健康に なって、病 捨てた (治した) ことが 恩だ。

10) [浸水が酷くなっているので、側溝を作ってくれるよう A が B にお願いして来ている]

B : ita at'agara josān tsimui: itigaradu, ma:

じゃ 明日から 予算 見積もり やってから、

ifi hirarirja:, ma unni Ji kutaja, nidi turafi çiriju:.

やって いけるから、 そのように やって 来るまでは、我慢して くださいよ。

A : ndadu ŋimanu ujandja: ŋimanu ujafi N nundi aruban,

あなたは 島の 親なんだぞ。島の 親で どうしてでも

nuguŋi aruban, ita: u dzu: minja banuja ikafinnagi, ifi turafi wari.

どうであっても、 じゃ それ 住民は 私達は 生かすように、 やって ください。

次の用例は、はじめのものがたり文で伝えている《意見》、その《根拠》としての内容の部分が *du* の形をとる単語によってさしだされている。

11)

I : so:to nangikjandja: çiko:kija ŋija, tama utu utundja:.

相当 難儀したんだぞ。飛行機は 来ては、弾 撃つ 撃つんだぞ。

naija min muti ku: naija nun muti kundi umadi bu:ru

今度は 水 持って 来い。今度は 何 持って 来いと そこから みんな

nanmeina nanmeinandi tundafiti, kamanki fokurjo katamidu burundja:.

何名ずつ 何名ずつと 行かせて、あそこへ 食糧 担がせて いるんだよ。

*du* が、主格の *ŋa* 格の単語にくっついて、主語として働く場合、いくつかのものごとの中から、大事なものとみて一つ取り出した《ものごと》を表している傾向がある。

12) [血圧が異常になった時、さまざまな現象が起こることについて話している]

G : ujaju ketsuatsu kanai nnjaru tunadu bagaru.

それはね 血圧 かかって みた 人が 分かる。

ɸuganu tan bagaranunjo.



他の 誰も 分からないよ。

13) [戦後の食糧をどのように食いつないでいたかについて話している]

iju tui kurja:, kaguriti, mutiti, untitu ijunta kinafi, banuja  
魚を取って 来たら、隠れて、持って行って、芋と 魚など 換えて、私達は  
φuŋajo:, wantan kurufi, ifiti, ma dunudufi kanunsai.  
食べるけどね、豚なども 殺して、やって、 自分自身で 養うよね。  
kantatija ma ijubagai tuiti, ijubagai haninunsaja:. φu: munu  
あいつ達は[漁業の人]魚だけ 取って、魚だけ 食べられないだろ? 食べる もの  
minunsai. ugara mararija kagaiti, bu:ru nnurundjanai.  
ないよね。それから マラリアに かかって、みんな 死んだんだよね。

F : unnibi そうだから、

I : no:gjoninŋadu ifiban ataru.  
農業人が 一番だった。

14) [方言を教えるのは誰が良いかについて話している]

E : ma naibagindu naru. naigaraja, naidanginu.  
今までも できる。[私達は]今からは、できそうにない。

G : e.i.

E : tukurudukuru baffidu kiru  
所々 忘れる。

G : ife:ma: そうだね。

E : so:tidu arujungara,  
わけだから、

G : e.i.

E : ndaninu t'untagadu nagara ubuituiti.  
あなたのような 人達が 今から 覚えといて。

しかし、du が、主格の ŋa 格の単語にくっついて、主語として働く場合、上の用例のように排他性をもつわけではない。次にあげる用例では、場面にも話し手の想定の中にも、他のものごとがなく、du の形をとる単語は、話し手が大事なものとみて取り出した《ものごと》を表しているものもある。

15)

F : bantaja ma nuttija minundu ndija ma fimu ga:tagata φuringaitijo:,  
私達は 命は ないよと 言っては、 肝 ガタガタ 震えてね、  
butaŋadu, φu: ai, nanni umanki kununki, nanni:ni uŋadu iti,  
いたけど、運が あって、そのまま そこに 来ないで、そのままに それが行って、  
unnanki dzo:riku kjaru-sa: unu kantainadu:.  
沖縄に 上陸 しただろ? その 艦隊が。

I : ife hadido. jonki: kundidu sangatsu sanitidu ataba:,...  
そうだと思うよ。四機 来ると 三月 三日だったから、…

16) [正月はいつから新暦でやるようになったのかについて話している]

B : bu:ru kju:nu ufí. ndimurañadu ittin hadimi fínnu hadimari.  
すべて 旧暦の うち。比川村が 一番 始め 新暦の 始まり。

### 2-3. bagai

bagai の形をとる単語は、現実世界のいくつかのものごとの内から一つだけ取り出して、話し手がとりたてた《ものごと》を表す。すなわち、bagai の形をとる単語は、《限定》を表す。

はじめの用例は、bagai の形をとる単語が補語として働いている場合である。

17)

M : diñja atatin,

お金は あっても

I : n. dʒetai ijuntan unti mai aru t'uñadu kai haritarujungara,  
うん。絶対 魚なども 芋 米 ある 人が 買って 食べられたから、  
banuja untin hatagini ansai. çikokiña ku: dʒikanja ma taigai  
私達は 芋も 畑に あるよね。飛行機が 来る 時間は 大概  
bagaidu butarujungara, uña kunu basuni: hataginki iti, unti kifi:,  
分かって いたから、それが この 時に 畑へ 行き、芋を 耕し、  
e: ifi, muti fíti, ma: kuburantaki mata untatin mandi  
そう、持って 来て、 久部良などへ また それ達も いいと  
çikokiña ku:ban, ma turanutu, φu: munu minunsaja:.  
飛行機が 来るとしても 取らないと、食べる もの ないだろ？

I : iju tui kurja:, kaguriti, mutiti, untitu ijunta kainafi, banuja  
魚を 取って 来たら、隠れて、持って行って、芋と 魚など 換えて、私達は  
φuñajo:, wantan kurufi, ifiti, ma dunudufi kanunsai.  
食べるけどね、豚なども 殺して、やって、 自分自身で 養うよね。  
kantatiña ma ijubagai tuiti, ijubagai haninunsaja:.  
あいつ達[久部良の人達]は 魚だけ 取って、魚だけ 食べられないだろ？

この用例は、戦時中の食生活について話している場面である。農業人である話し手Iは、芋や米などを作っていて、それと魚を交換して、魚を食べていたことや、食糧として豚を飼っていたことを、ものがたり文で伝えている。それにたいして、漁業を営む久部良の人達は、芋などが無いので、魚と芋を交換して、芋を食べる。とすれば、久部良の人達は、少ない魚をもとに、芋を得て、食いつないでいかなければならない。そのことを知っている話し手Iは、久部良の人達が、芋と交換するために、魚を食べることができないことを知っていて、そのことを前提に、saja たずね文の内容として関係づけて聞き手に確認要求

している。つまり、ここでの *bagai* の形をとる単語「魚」は、現実世界のもの「芋、米、豚」などといった食糧のうちから、一つだけ取り出された《もの》であり、「食べられない」《対象》を表しているのである。

18)

I : *iti, ikimafɪnʃɪja hanaʃi ki watanajo:, ma:*  
 そうして、池間先生が 話を して いらっしやっただね、  
*unu kusukuda dagujo unta asai, ʃi hatandido:*  
 その 蝕んだ芋の 虫をね それなど 漁って、自分 食べたってよ。

F : *nje:..ええー*

I : *N:unu biɲuibaga:idu haninurundi, nuguru munuja bu:ru handi.*  
 その クワズイモだけ 食べられないって、残る ものは 全部 食べたって。

M : *N:うん*

この用例も、戦時中の食生活について話している場面である。話し手 I は、まずはじめの文で、戦時中どんなものを食べていたのか、伝聞のものがたり文で伝えている。そして、後の文で、食べられなかったものがあつたことをものがたり文で伝えている。その不可能な動作の対象は、「*biɲui* クワズイモ」という単語によってさしだされている。さらに、話し手 I は、それと比べながら、残るものを際立たせながら、その残るものをすべて食べたことを伝聞のものがたり文で伝えている。つまり、ここでの *bagai* の形をとる単語「*biɲui* クワズイモ」は、現実世界の他のもの「蝕んだ芋、残るもの」などといった食糧のうちから、一つだけ取り出された《もの》であり、「*haninuru* 食べられない」《対象》を表しているのである。

19)

G : *kanninganu ifitarai u:.*  
 カニングの 石盥 それ。

E : *u: unta nainu agamintanaru ki:gafibagaidu irundi kannaru.*  
 それ それなど 今の 子供達が 機械でだけ やると 考える。

*t'u:ʃɪndija ifi ʃibija.*  
 人でって は やれるか (やれないよね) ?

G : *mata unni unninu amitigara unni su:ʃi ʃi t'sanu-saja:.*  
 また そのように そのような 道から そのように 引っ張って来れないだろ?

E : *nu uja ki: dapparafi unni ki:magura ki:, ʃa:ntu narabi,*  
 何 それは 木 そのように 木枕 して、ちゃんと 並べて、  
*maibaranki ututija ma:raʃija unninu ʃibamiti pasaguntagaradu*  
 前辺りに 置いといては 転がしては そのような 狭道 岩場の隙間から  
*unni unnidu ubuginu ifiʃibuguna ma:tandi ndi warudo:.*  
 そのように そのように 大きな 石など 転がしたと 言って いらっしやるよ。

## 2-4. N

N の形をとる単語は、現実世界の他のものごとと同じように存在するとみて、話し手がとりたてた《ものごと》を表す。すなわち、N の形をとる単語は、《ふくみこませ (共存)》を表す。

はじめにあげる用例は、N の形をとる単語が主語として働く場合である。

20)

E : dzuka: naibi-ja ma nainu agamintaja:

絶対 できるね? 今の 子供達が (今の子供達にはできないよね?)

G : unuga tija unu ifibuguja nugufi ugिताja nkafija

そうだが、 その 石は どうやって 起きたか (起こしたか)? 昔は

buruN a: guriN minu. unu dzidaini unu ifibuguja

ブルドーザーも クレーンも ない。その 時代に その 石は

nugufi ugिताndindanta ndi kangarindiju:. kangai t'sanusa:.

どうやって 起こしたと あなた達 考えろってね。考えられないだろ?

この用例の場面は、家を建てるために、昔は材木をどのように運んでいたのかについて話している場面である。話し相手 E が今の子供達は自分達の手で運ぶことはできないということ的前提にした YesNo たずねの kibija 文で、G にたずねている。それに対して、話し手 G は、肯定することについて伝える代名詞を用いて応答している。話し手 G は先行する話しあいの中で、子供達が機械でしか運べないことを知っているのである。そして、あとの文で、昔はその機械がないことを伝えている。そして、話し手 G は、その機械のうちのいくつか「buru ブルドーザー」「guri クレーン」をあげている。この場合の、N の形をとる単語は、その機械 = 《物》を表している。したがって、現実世界の他のものごとと同じように存在するとみて、話し手がとりたてた《ものごと》を表す。

次にあげる用例も、N の形をとる単語が主語として働いている場合である。

21)

I : igutaintu atanja naitansuja.

何人だったのか? 死んだのは。

F : fja: ibitati atakaja na igutaitundi bagaibina:.

少しだったのかな。 何人だと 分かるか?

I : manamidunki ciko:ki N: tamaji utijo, utufi utufi, fimirisanu.

マナミドゥへ 飛行機が 弾 落としてね、落して 落として、かわいそう。

F : un.

うん。

I : ciko:fintan umi: taigai nnundjanai.

飛行士なども そこで 大概 死んだんだぞ。

F : ahha.あつは一。

この用例における場面は、戦時中飛行機が飛び回っていたことについて話している場面である。まず、話し手Iは、疑問詞たずね文でどれくらいの人が死んだのかたずねている。したがって、話し手Iは、誰かが死んだのは知っているが、その数=程度が知らないので、たずねているのである。それにたいして、話し相手Fも、疑い文でその程度についてひとまず答えている。つまり、場面においては、死んだ人が何人かいることが前提になっているのである。

そして、その話を受けて、話し手Iは、飛行士が複数いて、大概死んだことを述べている。それは、Nの形をとる単語の語構成に《双数》あるいは、《複数》であることを表す形態素「-nta」があること、「taigai 大概」という副詞があること、先行する文の中にある述語と同じ動詞「nnun 死んだ」が文にさしだされていることから、理解できる。つまり、そこには、一般化されるほどに、死んだ人が複数いたことを伝えているのである。したがって、Nの形をとる単語は、ひとつだけではなく、現実世界の他のものごとと同じように存在するとみて、話し手がとりたてた《ものごと》を表す。

次にあげる用例は、Nの形をとる単語が状況語として働いている場合である。この用例は、方言を教える状況について話している場面である。話し手Gは、学校の先生達が話し手Gを含めた老人達に家で方言で話をして、方言を教えるよう、依頼されたことを伝えている。

22)

G : unnibidu,            nai    nainu    agamintankija    gakkunu    jinʃintana    atatin,  
 そうだからこそ、今    今の    子供達には    学校の    先生達であったとしても、  
 danija ho:gendu a: tami.    hogenʃidu hanafɪ ki tami    turafɪ çiri çirindidu  
 家では 方言を            教えて。方言で    話を    して 教えて    下さい。    下さいと  
 nai.    ʃigonen maigara nan ndi    buija kiru nai ʃikagoroja anu tun...  
 なって。四、五年    前から    今も    言って    いる。    今    近頃は    私    全然…

この用例において、その依頼は四、五年前で行われていて、また今続いていることがさしだされている。そのことは、「ʃigonenmai 四、五年前」という単語が《はじまりのとき》を表す gara 格の名詞であること、「na 今」という単語が述語の継続相動詞「ndi buija kiru 言っている」と結びついていることから、理解することができる。したがって、「ndi buija kiru 言っている」「na 今」という時間は、「ʃigonen mai 四、五年前」同じように存在しているのである。

ほかにも、Nの形をとる単語は、現実世界の他のものごとと同じように存在していて、それらより際立ったものだとみて、話し手がとりたてた《ものごと》を表す。すなわち、Nの形をとる単語は、《極端》も表すことができる。次の例では、複数いた日本兵のうち、序列の高い日本兵=曹長が《はたらきかけの対象》に据えられている。したがって、ここでのNの形をとる単語は、日本兵の中にいる極端なものごとをとりたてているのである。

23) [終戦の前まで日本兵にこき使われていた与那国の人達が、終戦後にしたことの話]

I : nihonnu t'ujajo· unnibidu,            çitaindi    ʃiɲu    riso:    mutitidujo·,

日本の 人はね そうだからこそ、兵隊って もう 理想 持ってね、  
 nu: muti ku ku muti kundi fu:sen umi burutaŋi, ma:  
 何 持って 来い 来い 持って 来いと 終戦 そこに いるうちに、  
 ujabinki tama utiti, unkara: kamanki unna:...nki dʒo:riku kiti, ma:  
 上へ 弾 撃って、それから あそこへ 沖縄…へ 上陸 して、  
 Magitaba, ma fu:sen natabaju:, so:ŋonta:N ibi bo:rjoku kjaru hadido:.  
 負けたから、 終戦 なったからね、曹長などにも 少し 暴力 したろうよ。

## 2-5. bagin

bagin の形をとる単語は、現実世界の他のものごとと同じように存在していて、それらより際立ったものとみて、話し手がとりたてた《ものごと》を表す。すなわち、bagin の形をとる単語は、《極端》を表す。

24)

F : çiko·kin unni dʒikan minunkidu,  
 飛行機も そのように 時間 なくて、  
 ku:jungara, anu ma dʒettai çiranundi nditi butanŋa,  
 来るから、私 絶対 行かないと 言って いたが、  
çiranunki buraninusa: buraninurja, ma: tamaja  
 行かないで いれないだろ？いれないから、 タマは  
 agamisuit'udu arujungara:, agamisuit'ubagin tatidu:. i: hamai magai,  
 子供連れだから、 子供連れまで 働いて、ご飯 食糧を 賄い、

この用例では、話し手が、戦闘機が飛んでいる中、多くの人が食糧を取りに行っていたことについて話している。そして、話し手は、自らがその中の一人であったことを伝えている。そのことは、波線部にさしだされているように、可能動詞のうけし形を述語にもつ文によって示されている。その後、話し手は、そのように働いて暮らしている一人、「agamisuit'u 子供連れ」を主語に据えてさしだしている。普通男達が食糧を取りに行く状況で、その一人として極端な人をあげているのである。

25)

I : hinandanki bu:ru wa:nu da dantabagin kujafe: ifiti, φu: munu  
 避難所へ みんな 豚の 家なども 運んで、やって、食べる もの

この用例では、話し手が、戦闘機が飛ぶようになってきた中、調理器具「nabi 鍋」などを洞窟へ運んでいたことについて話している。そして、話し手は、運んでいたものの一つとして調理器具だけでなく、豚の家なども運んでいたことを伝えている。豚の家まで持っていたことを伝えて、家にあったほとんどのものを運んでいたことを伝えているのである。したがって、その豚の家は、運んでいたものの中で、極端なものなのである。

## まとめ

与那国方言における《とりたて》形式についてまとめる。ja は《対比》を、du は《特立》を、bagai は《限定》を、n は《共存》《極端》を、bagin は《共存》《極端》を表現している。これらの形式を、話しあいの構造の中で、話し手が、どのようなものごととして文の内容に取り込んでいるのかを、分析の中心にして記述した。

しかし、課題も残っている。課題は大きく分けると、3つある。

一つ目は、ここで扱っている、単語のとりたての形が、面接調査でも確認が取れているものと、自然談話の中に与えられているもので、数の多いものから取り上げているということである。他の言語との比較の中で、ありえる形式もあるかもしれないが、その調査はこれからの課題である。

二つ目は、これらの系列と、疑問詞にしかくつかない「ba」をとりたての形式として認めるかどうかはここでは触れることができなかった。「ba」は、疑問詞にしかくつかないということから、du の形のように現実世界のものごと自体を際立たせるということができないと考えられるからである。それは、疑問詞の表す《ものごと》は不定であるので、《ものごと》を際立たせることはできないのである。しかし、「ba」の形は、何らかの文の部分を取りたてているということにおいては、とりたてらしさを持っている。このことから、《とりたて》の定義通りに最も理解することのできる「ja」などの系列から文の部分を取りたてるだけの「ba」の形式を区別して、下位分類する必要があるだろう。

三つ目は、とりたての形をとる単語が主語に据えられる場合のあり様について分析しつくすことはできなかったことである。du の用例 12~14 に示してあるように、主語に据えられると、とりたての形をとる単語に排他性が加わってくる傾向がある。

このことは、主格の ja の形をとる単語に、主体を表現するという意味・機能のほかに、とりたて性が潜んでいるということを示している。しかし、ja の形には排他性が義務的に加わらない。とすれば、ja の形をとる単語が、主語に据えられる場合も入れて、主格の形ととりたての形がむすびつく時に、異なる意味・形式を表すように、発展していると考えべきである。あるいは、主格の形をとる単語、とりたての形をとる単語のうちにある、陳述性の発展の傾向であると言える。今後は、これら主格の形をとる単語のとりたて性と、本稿で明らかにした単純なとりたての形をとる単語と比較して分析し、さらに、主格の形と単純なとりたての形を合せた単語を総合的に記述して、与那国方言の《とりたて》の体系を一般化しなければならない。

## 謝辞

本研究は、日本学術振興会科学研究費補助金「与那国方言のモダリティ体系の記述」（課題番号：17J08017）の助成を受けている。また、査読者の方からも御指導と貴重な御意見を頂戴したことに、深く感謝申し上げます。編集委員会の方々からの御配慮、話者の方々からの御協力を賜りましたことに、深く感謝申し上げます。

## 注

1) 鈴木 1972 は、とりたてが陳述的な意味の一つであると次のように述べている。

陳述的な意味（陳述性）という概念は、文の素材的な内容をめぐっての主体（話し手）のさまざまな関係、態度の文法的な表現を一括したひろい概念であって、分析＝総合的な文では、いろいろな下位の文法的な意味（カテゴリー）に分化している。

いままで例にあげた陳述的な意味は、主としてそのなかで中心的な位置をしめるモダリティおよびときである。このほかに、みとめ方、ていねいさ、とりたてなども陳述的な意味である。[鈴木 1972 : p.18]

- 2) 陳述的なかわりについては、他にも、奥田 1973 : p.40、奥田 1979 : p.161 を参照。
- 3) おそらく、これらの系列の単語の文法的な形は、そのような形をとる単語が表す《ものごと》と現実世界の他のものごととの関係だけでなく、現実世界の他のものごととの関係を前提にしていることまで言語的に伝えられるというところで、他の陳述的な意味と異なっているのだろう。《とりたて》を表現する諸手段は、reference や presupposition が言語学において表にとりだされるにあたって、格好の対象であるだろう。このことについては、別で述べることになるだろう。reference と presupposition については、Падучева1985 : p48 や Падучева1996 を参照のこと。また、reference については奥田 1996 でも次のように言及されていて、今後深めていく必要がある。

文の対象的な内容は、その具体的な発話においては、はなし手の referenciation(関係づけ)の行為と predication(のべたて)の行為によって作りだされている。はなし手は言語的な諸手段をもちいて、referenciation においては、特定の出来事あるいは特定の人や物を文の内容のなかにもちこみ、predication において、その特定の人や物に属性（動作や変化や状態、特性や関係や質）をつけくわえるのである。したがって、場面やコンテキストのなかで実現する、具体的な発話としての文が、そこに使用されている諸手段によって、いかなるレアルな世界をさしだしているか、いかなるポテンシャルな世界をかもさしだしているか、ということ、発話のうけとり人は、その言語的な諸手段の分析をとおして、理解しなければならない。[奥田 1996 : p.295] 【下線は目差】

- 4) 他にも、不定代名詞に N の形がくつつく場合も、あげられる。N の形をとる不定代名詞は、《極限》のヴァリエーションとして見ることができる。しかし、そのばあい、《とりたて》の表現として働いているというよりは、程度副詞や時間副詞として働くようになって、《temporality 時間性》（とくに時間的限定性）の表現手段として位置付けられるようになっていだろう。

●時間副詞

[運動会でどこの村が勝つのか話している場面]

G : ittin ifi ifiban naru munudu aṅa, itt<sup>n</sup>in magitaru kutu aṅa,  
いつも 一番 なる ものであるが、一点でも 負けた こと あるが、

●程度副詞

G : ja. anuja kitsuatsunu nuppa naitiju, nun nun naranundja.  
私は 血圧が 変に なってね、何も 何も できないんだぞ。

- 5) 意味と機能の相互作用と相互関係については、奥田 1979 を参照。
- 6) データは、1977 年度から 1985 年度にかけて行われた文化庁調査「各地方言収集緊急調査」



の際に収録された音声データのうち、琉球大学の琉球方言学研究室が所蔵していたものを、筆者が書き起こしたものである。なお、文化庁の音声データは、「方言録音文字化資料に関する研究」として国立国語研究所に移管され、収蔵されている。

## 文献

- 奥田靖雄（1973）「言語における形式」『ことばの研究・序説』、1984 所収、pp. 31-40、むぎ書房、東京。
- 奥田靖雄（1979）「意味と機能」『ことばの研究・序説』、1984 所収、pp. 159-169、むぎ書房、東京。
- 奥田靖雄（2015）「文のこと—その分類をめぐって」『奥田靖雄著作集』第 2 巻、言語学編 1、pp.292-304、むぎ書房、東京。
- 澤田美恵子（2007）『現代日本語における「とりたて詞」の研究』、くろしお出版、東京。
- 鈴木重幸（1972）『日本語文法・形態論』むぎ書房、東京。
- 當山奈那（2018）「与論方言のとりたて表現—〈極端—反極端〉、〈限定—反限定〉と関わりとりたて助辞を中心に—」、沖縄言語研究センター定例研究会発表原稿 2018 年 10 月 20 日、沖縄。
- 日本語記述文法研究会編（2009）『現代日本語文法 5 第 9 部とりたて 第 10 部主題』、くろしお出版、東京。
- 沼田善子（2000）「第 3 章とりたて」『日本語の文法 2 時・否定とりたて』金水敏編所収、pp.151-216、岩波書店、東京。
- 沼田善子（2009）『現代日本語のとりたて詞の研究』、ひつじ書房、東京。
- 野田尚史（1995）「文の階層構造からみた主題とりたて」『日本語の主題とりたて』、益岡隆志編所収、pp.1-35、くろしお出版、東京。
- Е.Д.Падучева（1985）*Высказывание и его соотносённость с действительностью*, Наука, Москва
- Е.Д.Падучева（1996）*Семантические исследования*, Школа "Языки русской культуры", Москва